

W

OMEN'S



NEWS

2007 MAY

S

PORTS

VOL.46

F

OUNDATION



ネパールで活動するバレーボール・モントリオール会
(ダマク難民キャンプ：フォート・キシモト)

J

APAN

Message 女性理事が増えない理由は？	三ッ谷洋子	2
インタビュー 女性に野球を身近に感じて欲しい	読売巨人軍「プロジェクト・ヴィーナス」	3
Opinion 高齢者体操教室に見るジェンダー・バイアス(下)	北田和美	6
Time Travel 「スポーツ」「社会」		7
Women's Sports 50回を超えた草の根普及活動“キッズじゅうどう”	永田千恵	8
Column アメリカの風「女性スポーツ便り」第1回	羽石架苗	9
会員の広場 大貫映子さん 田中良子さん		10
事務局便り		11

女性理事が増えない理由は？

女性スポーツの発展に向けた“世界基準”として知られる「ブライトン宣言」。1994年の第1回世界女性スポーツ会議(英国・ブライトン)で決議されたものです。全10項目のうち、私が特に注目しているのが「スポーツにおけるリーダーシップ」。

「すべてのスポーツとスポーツに関する組織のリーダーシップや意思決定の場において女性は少数派である。これらの分野における責任者は、すべてのレベルにおいて、採用や能力の開発、そして人材の維持確保に特別な配慮をしながら、女性のコーチ、アドバイザー、意思決定者、役員、管理者、そしてスポーツ職員を増やす政策やプログラムを作り、またそのような機構をデザインしなければならない」(日本語訳 NPO 法人ジュース)。

IOC(国際オリンピック委員会)はこの翌年、女性初の副会長アニタ・デフランツを委員長とする女性委員会を設置しました。2000年3月の第2回IOC世界女性スポーツ会議(パリ)では、ガイドラインを示しています。

「2000年12月31日までに、意思決定権のある地位に少なくとも10%の女性を置くという目標に到達すること。(中略)2005年には20%という目標は維持し、達成を確実なものにすること」(同)。

翌2001年6月、JOC(日本オリンピック委員会)は第1回アジア女性スポーツ会議(大阪)において「ブライトン宣言」に署名しました。また、昨年5月には「2006世界女性スポーツ会議くまもと」をIWG(国際女性スポーツワーキンググループ)と共に開催し、ついに日本にも女性スポーツを応援する風が吹き始めたのではないかと内心、喜んでいました。

その成果を期待していたのが、この春に行なわれた各スポーツ団体の役員改選です。JOCはそれまで副会長に小野清子さん(日本スポーツ芸術協会会長、参議院議員)、理事に小谷実可子さん(シンクロナイズドスイミング銅メダリスト)と平松純子さん(日本スケート連盟理事)が入っており、理事25人中、女性理事は12%でした。

世界から取り残される 日本の古き男性社会

しかし、新理事の顔ぶれを見て落胆しました。女性副会長はゼロ。小谷さんと平松さんの2人が再選されただけで、結果として女性理事の総数は3人から2人に減っています。会長を含む全理事23人のうち、比率はわずか一桁の9%に後退してしまいました。

3年前のアテネオリンピックを覚えていますか。日本選手団の選手数は史上初めて女子が55%を占め、男子を上回りました。メダルラッシュとなった16個の金メダルのうち、過半数の9個は女子選手の活躍によるものです。

彼女たちを輩出した4団体の女性理事数はどうでしょうか。全日本柔道連盟:23人中ゼロ。日本レスリング協会:30人中ゼロ。日本陸上競技連盟:26人中2人(8%)。日本水泳連盟:23人中2人(9%)。JOCと同様、2000年末の目標値10%にも届いていません。

目標に達しない場合の対策について、前述の第2回IOC会議の決議文ではこう謳っています。「その理由の綿密な検討を行い、目標達成に向けた実行計画を作成すること」。JOCの「女性スポーツ専門委員会」には、まずこの問題を取り上げてほしいと思います。

女性に野球を身近に感じて欲しい 読売巨人軍「プロジェクト・ヴィーナス」スタッフの皆さん

「男性社会」のプロ野球界に、新しい動きが出てきています。新たな女性ファン開拓のために、女性の視点に立った女性たちが奮闘しています。一昨年3月、読売巨人軍の女性職員によるプロジェクトチームが発足。名づけて「プロジェクト・ヴィーナス」。企画から運営までを手掛けているスタッフの皆さんに、お話をうかがいました。(聞き手:高橋昭子)



選手とのふれ合いの場「ヴィーナス・サロン」(丸ビル:カフェease)。左2人目から林昌範選手、高橋由伸選手、高橋尚成選手(読売巨人軍ホームページより)

女性の視点に立ったファンづくり

— 「プロジェクト・ヴィーナス」を始めるきっかけは何だったのでしょうか。

2004年8月、球団代表に就任した清武英利が球場に女性ファンが少ないことに気づき、「女性ファンを増やすにはどうしたらよいか」「女性にも野球に関心を持ってもらうにはどうしたらよいか」と思ったのが、そもそもの始まりです。

まずは女性の意見を知りたいということで、私たち球団の女性職員が意見を求められました。意見と言われても、それまで女性ファンの視点に立ったことがなかったので、まず、東京ドーム内を回ってみることにしました。

すると、たばこの煙がとても気になったり、販売されている食べ物があまり美味しくなかったりということに初めて気づきました。それまでドーム内をゆっくりと回ったことはありませんでした。

た。気づいたことを幹部へ報告しました。

そして一昨年3月に、このプロジェクトがスタートしました。

— 具体的な内容をお聞かせください。

現在は、主にホームページ「ジャイアンツ・ヴィーナス・ネット」の運営や、様々な企画の提案などを行っています。「ヴィーナス・ネット」のコンテンツは「エクササイズ講座」「ふおと・ぱーく」「アンケート」「女子硬式野球応援ページ」「イースタン情報」など盛りだくさんです。2軍選手の打席結果は、翌日にアップするようにしています。これは若手のPRになっています。オリジナルのグッズのネット販売もしています。

— 「プロジェクト」のオリジナルですか。

これまでのジャイアンツ・グッズは、Gのマークでチームカラーのオレンジの物ばかりでした。オリジナルロゴをつくり球場以外でも使えるもの、日常でも使えるものを考えました。ネイル

シールや爪とぎもあります。

— どんな商品が人気ですか。

好きな選手の名前や自分のイニシャルを入れられるペンダントやキーホルダーといったオリジナルグッズが人気です。若手選手の名前も入れられ、女性らしい色やデザインになっています。



「ヴィーナス・プロジェクト」の皆さん（左から野崎さん、江里口さん、蟻川さん、八巻さん、松本さん）

— アクセスも徐々に増えているようですが、手応えは感じますか。

もともと私たちは球団の事務職として仕事をしていたので、女性ファンと接する機会は全くありませんでした。ですから、当初は、何をしてもよいかわかりませんでした。

まず2軍のホームグラウンド（ジャイアンツ球場＝神奈川県川崎市）に行き、120人ほどの女性ファンに対面アンケートをしました。ここには若手選手を支え、応援し、自分が選手を育てているという意識の女性ファンが大勢、来ています。

アンケートの中に、「女性ファン同士が集えるところがほしい」という回答が多数ありました。そこで「ジャイアンツ・ヴィーナス・ネット」を立ち上げたわけです。

インターネットのサイトを通して、女性ファンの意見が直接、球団運営に反映できるようになりました。

— ファンとしては、選手と直接ふれあえる場がほしいと思うのですが、そのような機会はありますか。

「ヴィーナスサロン」を開催しています。野球場に足を運ばない人たちへのきっかけづくりとして、試合以外に女性に興味を持ってもらえるもの

として企画しました。大きなホールではなく、間近で選手を見られるレストランやカフェでトークショー等を開催するというものです。

参加者と選手との会話のキャッチボールを楽しんで、少しでも野球に興味を持っていただければと思っています。昨シーズンは女子大生、OLを対象に3回開催しました。

— 楽しそうですね。参加者の反応は。

選手の人柄に触れてもらえ、和やかな雰囲気です。全員が終始、笑顔のイベントでした。アンケートに「今度、球場に行ってみよう」と書いてくださった方がたくさんいました。参加者の中には妊婦の方もいらして、選手がその方のおなかを撫でたりしていました。普通では考えられない光景です。

— 「サロン」以外のイベントはありますか。

清武球団代表が、ドーム内のよいシートを何席か提供してくれることになり、私たちがその使い方をいくつか提案しました。

お母さんと女子高生を招待する「お母さんを連れてきてシート」と、何度か球場に来たことのある女性を対象に招待する「ごほうびシート」という企画が通りました。

「私たちが意見を言っている」

— 皆さんがこのプロジェクトに関わる前と後では、何か変化したことはありますか。

プロジェクトの仕事は、各自がこれまでしている業務、例えば秘書や広報とは全く異なります。企画を立てることなどありませんでしたから、最初は企画書の書き方が全くわかりませんでした。

でも企画を立て、企画書にして提出することで、自分の意見を言ってよいことに気づきました。それまでは受身の業務でしたから。

また、それまで他球団のファンサービス等、あまり気に留めていませんでしたが、プロジェクトにかかわるようになって、アマチュアスポーツや野球以外のスポーツで、どのように女性ファン獲得をしているのか、スポーツ認知をどう高めているのかに、目を向けるようになりました。

— 他に影響や変化があったことは。

野球振興室が担当していた女子硬式野球の支援を、「プロジェクト」と連携しながら展開するようになりました。これから母親になる世代、子供たちを支援することは、新たな女性ファンの開拓に結びつきます。幅広い女子野球のPRにもなります。ここからもどんどん広げたいと思います。



高橋由伸選手が優勝記念ネックレスを授与（読売巨人軍提供）

— 野球をやっている女子選手たちにとってはうれしいことですね。

具体的には、関東女子硬式野球リーグへのジャイアンツ杯の提供、ポスター作成。ネットで大会紹介もしています。表彰式に高橋由伸選手が来てくれたこともあります。（写真上）

試合結果は読売新聞の県版・地方版に掲載しています。

私たちが一方的に支援をしたり、何かを与えるのではなく、選手たちと話し合い、彼女たちの意見を聞きながら進めています。「プロジェクト」の支援が始まる前は、選手自身、女子野球を広めようという意識すらありませんでした。高校のクラスメートに女子野球の大会があることすら知られていませんでした。

— えっ、クラスメートにもですか。

大会ポスターは選手たちからの要望があって作成しました。女子高生が制服で駅へ掲示をお願いに行くと、無料で貼ってくれるそうです。大人が行ったら料金を取られるところですが。

女子野球の選手にアンケートをとったら、「教

師になって野球を広めたい」という意見がたくさんありました。何らかの形で硬式野球にずっと携わってほしいという思いが伝わってきます。

— 「プロジェクト」への周りの人たちの反応はいかがですか。

当初は、「女性たちだけでは、どうせすぐに終わってしまうだろう」という雰囲気が正直ありました。でも少しずつでも形が見えてくると、協力者も増えてきて、現在はジャイアンツの選手も協力してくれます。

また、私たちが東京ドーム内を回って女性として気になった点、例えば子供づれの女性ファンへの対応や喫煙スペースの改善など、具体的な要望が出たのは画期的だったようです。

ファンと直接、交流できる場を

— 今後の希望や抱負はありますか。

将来はファンの皆さんと直接交流できる場を持ちたいと思っています。また、ジャイアンツ球場周辺の皆さんとも是非、交流をしたいですね。

活動がすぐに観客動員数に反映されるものではありませんが、地道な活動の積み重ねが全てにつながっていくと思います。今後もどんどん企画を出していきたいですね。

他球団でも女性ファン対象のプロジェクトが立ち上げられると聞いています。是非、意見交換会をしたいと思っています。

— お忙しい中、ありがとうございました。

「初めは何もわからなかった」といわれる皆さんですが、プロジェクトも3年目に入り、最初の不安が自信に変わってきたようです。それに何より、「プロジェクト・ヴィーナス」を心から愛する気持ちが伝わってきました。

<プロジェクト・ヴィーナス> 2005年3月、読売巨人軍の球団女性職員によってスタートしたプロジェクト。プロ野球の女性ファンの開拓・拡大、野球ファン全体の裾野を広げることを目的に活動している。スタッフの平均年齢は37歳。

高齢者体操教室に見るジェンダー・バイアス（下）

— スポーツ・オウエンス21の活動から —

北田和美

●体で覚えたことを拭い去る難しさ

高齢者を対象とした健康づくりの指導現場では、特に男性と接して考えることが少なくありません。子どもの頃から、覚えてきた“学び”が体にしみこんでいます。

未だに富国強兵下の教育が影響していて、教育の偉大さと恐ろしさを感じるとともに、今、教育者として何をなすべきかを考えさせられました。

ここでご紹介しているのは、2005年春の大阪女子体育連盟主催「スポーツ・オウエンス21」セミナーで、健康運動実践指導士の方々の話題提供を中心に実施した内容です。

通常は、成長期の子供にかかわることが多く、生涯体育をめざして指導している体育教師にとって、「これらの現実を、子ども世代や孫世代に継承させないようにするにはどうすればよいのか」「学校教育の中で、今、大切にしておかなければならない指導のポイントはどこにあるのか」を真剣に考えることが必要だと気づかされる、よい機会となりました。

●希望を持って発信し続けよう

こう見てきますと、一度、刷り込まれたものはぬぐいがたく、絶望的のようにも受け取られそうですが、次のようなうれしい事例もありました。

明治生まれの親に「趣味を持つことは悪いことだ」「楽しむことや遊ぶことは罪悪だ」と育てられてきた男性が、女性指導者による「高齢者体操教室」に参加して、そのトラウマから開放され、劇的に伸びやかに生きられるようになったということです。

70歳以上の男性であっても、考えようという意思があり、理解しようとする人は変えられるという発言に、希望の光が見えました。セミナー参加者の感想は、次のようなものでした。

*気づいている女性から発言することが重要だと感じた。

*人としての生き方を考えさせられた。

*ここで話が出来たことで安心した。

*このような場に足を運ぶことが重要だと感じた。

*私たちの世代でも、今までの刷り込みで自分自身、気づかないでしてしまったこともあり、意識の研ぎ澄ましが大切だ。

*ここで学んだことを、自分の生活に社会にどう活かしていくのが課題である。

このような感想を聞けたということも含め、参加者による討議の中から見出せたものが、予想以上に大きかったことを、改めて感じました。

●男性から見た「スポーツジェンダー」

私たち「スポーツ・オウエンス21」は、女性のスポーツ環境を向上させようという目的で活動をしています。考え方の軸足を置いているのが「ジェンダー・バイアス」（「～らしさ」から生まれる偏見や先入観）です。

これまで女性の視点から社会の矛盾を考えてきましたが、男性の視点から見るとどうなのでしょう。昨年8月のセミナーでは「スポーツがしたい女性がいる一方で、スポーツをしたくない男性もいる」と主張されている仏教大学の大東貢生さんをお招きしました。テーマは「運動音痴の男の子とジェンダー」。大東さんが話された「スポーツが得意でない男の子」から見た社会の偏見は、男女の性別にとらわれない教育のあり方の大切さを痛感させるものでした。

この時のお話を受けて、今年1月のセミナーは「男らしさの社会学」からの気づきをテーマにパネルディスカッションを行いました。

「女らしさ」があれば「男らしさ」もあるわけで、これからも、身近にある事柄に目を向け、地道な発信を続けるセミナーを開講していきたいと考えています。

<きただ・かずみ> スポーツ・オウエンス21事務局担当。大阪女子短期大学助教授、大阪女子体育連盟副会長。WSFジャパン会員。

TIME TRAVEL

WSFジャパンがスタートしたのは1981年。今から4半世紀前です。その当時は一体どんな社会だったのでしょうか。この欄では、女性スポーツと女性を取り巻く社会の話題を、当時の新聞記事から取り上げ、時代の流れに目を向けてみることにしました。

スポーツ

男のスポーツ 女の挑戦状 それなりにルール変え

<1980年10月23日：日経新聞>



従来男だけのスポーツと考えられていたラグビー、サッカーアイスホッケーや格闘技の柔道、大きなパワーが必要なパワーリフティングやボディビルへの女性の進出が盛ん。

だが、男性と女性に体力差があることも事実。サッカーの場合、全国大会は8人制、25分ハーフで行なう。グラウンドの大きさは男子の3分の2、使用球は4号と、一回り小さくて軽いボールだ。アイスホッケーは2分の1ルール。リンクの大きさは同じだが、男子の1ピリオドが20分なのに対して10分である。

<現在は> 女性がやらないスポーツはないと、いい時代となった。ルールについては、サッカーでは女子のルールは男子と同じ。アイスホッケーは4月の世界選手権（日光）では1ピリオド20分で実施。ただし、「ボディーチェックング」の反則やフルフェイスガードの着用義務等、女性ならではのルールもある。

社会

中野区が長期「婦人セミナー」 どう生きる“女性の時代” 希望者が殺到、抽選に

<1980年7月13日：朝日新聞>



中野区が国連婦人の十年中間年を記念して、「婦人セミナー」参加者の募集をしたところ、定員50人のところ100人を超える希望者が殺到した。

当初は男性社会に問題があるので、男性も巻き込んだ形のセミナーにすべきとの意見もあったが、それを受け入れている女性の意識改革が必要ということで、女性対象とした。全39回の講座形式となっている。

<現在は> 「婦人」という言葉は使われなくなった。中野区のホームページで「女性」を検索すると中野区男女共同参画センターの「女性の生き方なんでも相談」が出てくる。女性相談員、女性弁護士が対応している。

50回を越えた草の根普及活動「キッズじゅうどう」 永田千恵

立ち上げのきっかけ

「“世界”を経験してきた女子の元トップ選手がこれだけ集まっているのだから、ぜひ、子どもたちに世界の技を見てもらおう。それが、今や日本女子柔道倶楽部のメイン活動となっている『キッズじゅうどう』（以下、キッズ）立ち上げのきっかけだった。



模範演技に歓声が上がる(千葉・飯山満小学校)

記念すべき第1回は2001年3月。千葉県船橋市にある小学校の協力を得て、まずは指導の仕方を体験させていただいてから本番に臨んだ。このときの講師は山口香、北田(旧姓・持田)典子、田辺陽子、溝口紀子、増地千代里(旧姓・立野)、渡辺涼子(旧姓・藤本)といったオリンピック選手たちを中心に、吉田彦彦も加わるというそうそうたる顔ぶれ。それもあってか、柔道未経験の小学生を対象にしたところ、定員をはるかに上回る応募があり、大成功となった。

以来、レンタル柔道衣を持参しての、「呼ばれればどこへでも行きます」という、いわば“宅配柔道教室”を全国各地で行なうようになった。そうして約6年。母親の視点を大切に、遊び感覚を取り入れた指導が「柔道に対して持っていた汚い、厳しいというイメージが変わった」「子どもたちの顔が生き生きしている」などと評判になり、気がつけば開催回数は50回を越えるまでになった。

今では「キッズをやってみよう」という会場を探したり、子どもたちを集めることよりも、指導を担当してくれる講師を集める方がたいへんだ。家庭に入った元選手たちに、一度、脱いでしまった柔道衣をあらためて着てもらうことは、なかなか容易ではないことを

知った。

ところで、この日本女子柔道倶楽部はどんな会なのかを説明したい。オリンピック、世界選手権、全日本の元代表を中心に、柔道家と柔道を愛する人たちが集まり、島谷順子を初代会長として2000年4月8日に設立された組織である。ここで事務局を担当させてもらっている私だが、実は柔道衣に袖を通したことすらない素人だ。しかも、事務仕事の経験もない。役立っているかどうかははまだ怪しいという、はなはだ頼りない事務である。

“素人”事務局

そんな状態だから、ここ数年は「キッズ」にスポンサーがついたことで、ビジネスとボランティア活動の狭間に立たされ、右往左往するばかりだった。WSFジャパンの三ツ谷洋子代表の力添えがなかったら、到底ここまでやってくることはできなかったと思う。この活動を通じて学ぶことは本当に多い。

07年も「キッズ」のオファーはいくつか来ている。毎年1回、この「キッズ」を楽しみにしてくれているところもできた。そんな子どもたちに、楽しい柔道教室を提供しようと、講師陣はこれからも奮闘してくれることだろう。私はこうした草の根活動の事務を次の世代が引き継いでくれるまで、お手伝いができればと思っている。(文中敬称略)



『キッズじゅうどう』は活動の柱

〔ながた・ちえ〕 旅行雑誌の編集者を経て、フリーランスライターとなり、スポーツとは無縁だったはずが、88年から柔道取材するようになる。その縁で、日本女子柔道倶楽部の発足から関わるようになり、現在、事務局担当。WSFジャパン会員。

アメリカの風「女性スポーツ便り」第1回
女性スポーツリーダーとしての認識と役割

羽石 架苗

テネシー州メンフィスの大学で、奨学金をもらいながらサッカーをするというお話をいただいて渡米したあの日から6年。当初、英会話も満足にできなかった私も、名門スミス大学でサッカーチームのコーチをし、ユーススポーツプロジェクトのメインメンバーとして働きながら、今月、無事にセカンドマスター(2つ目の修士号)を取得しました。

7月からスミス大学の姉妹校、マントホリョク大学(Mount Holyoke College)のサッカーチーム監督に就任し、3つの授業を教えることになりました。米国の大学レベルではアジア人の女性初のサッカーの監督です。同時に、マサチューセッツ大学で、コーチ学/体育教育学専攻(Sport Pedagogy)博士号取得の勉強を始めることになりました。

もちろんサッカー選手としても、ニューヨークにある「ニューヨークマジック」というセミプロチームで、キャプテンとして現役続行中です。

サッカーを通じた日米の架け橋

日本にいた頃から、“女性スポーツの発展”に興味があり、様々なボランティア活動に参加していました。米国では「タイトルナイン」(Title IX=教育修正案第9条。教育における男女差別禁止)をはじめ、スポーツ界における女性の立場が日本に比べてはるかに確立し、多くの女性がリーダーとして活躍しています。そんな国に渡って、情熱に拍車がかかりました。

4年前、日米女子サッカーの架け橋として活動するグループ「ブリッジ」を設立し、毎年、米国女子サッカーツアーをコーディネートしたり、米国で奨学金をもらいながらサッカーをしたいと夢見る日本の女子選手たちのサポートをしています。

最近では、日本女性としてはもちろん、アジア人女性としても恐らく初めて、NCAA(全米大学体育協会)が主催するNCAA Women Coaches Academyに、何百という応募者の中から25人の

参加者に選出されたり、南北アメリカ大陸代表として、世界規模で女性スポーツ発展のために活躍するスミス大学のクリス・シェルトン教授のもとで働くという機会にも恵まれ、日本や世界の女性スポーツ界での自分自身の役割を、徐々に認識するようになりました。

そして昨年、熊本で行われた世界女性スポーツ会議で、シェルトン教授がリードするワークショップの通訳&アシスタントを務めました。(写真下)

皆さんとの交流が楽しみ

WSFジャパンとの出会いも、そんな活動の中のことでした。渡米当初から米国WSFのメンバーだった私は、“日本人として”スポーツ界の女性リーダーという立場を自覚し始め、日本の女性スポーツの発展のためには、米国など世界中の女性スポーツとのつながりが大事であると思うようになり、WSFジャパンの会員として参加させていただくことになりました。

活動の中心は米国北東部マサチューセッツ、ニューヨーク周辺ですが、会議やワークショップ、そしてこのコラムを通じて日本の女性スポーツに関わる皆さんと交流できる機会を楽しみにしています。

〔はねいし・かなえ〕

1978年生まれ。栃木県宇都宮市出身。日本女子サッカーリーグ(Lリーグ=ジェフ市原)でプレーした後、米国にサッカー留学。順天堂大学スポーツ健康科学部スポーツ科学科卒業。メンフィス大学、スミス大学で修士号取得。コーチ学/体育教育学専攻(Sport Pedagogy)博士号取得を目指している。WSFジャパン会員。



シェルトン教授(右)と

■ 会員の広場 ■

大貫映子さん



海人(うみんちゅ)くらぶ主宰
(東京都練馬区)

最近の女性スポーツのことといえば、子育てしながら日本代表選手としてサッカーが続けられるように、日本サッカー協会が費用を援助して、遠征や合宿先に子ども同伴可で、ベビーシッターや家族連れも可能になっているという新聞記事を読み、日本でもやっとなんかそういうことに理解すようになったのか！と新鮮に思った。

さて、自分の近況報告を。ここ数年、日本でも海で1～10 km以上を泳ぐ「オープンウォータースイム」「オーシャンスイム」の大会が増え、「海人(うみんちゅ)くらぶ」というサークルを中心に、「海で泳ぐのは楽しいですよ～」というスイムクリニックや、イベント、ツアー(四国、沖縄や水泳天国オーストラリアへの大会参加)などの講師、引率者として出かけることが増えた。

ここでも女性は元気だ。日本の最高齢女性オーシャンスイマーは、77歳で海デビューし、「一度、海で泳げれば幸せ」と言っていたが、今なお81歳で年に5回ほど1.5～3 kmの大会を完泳するのを楽しみにしている書道の先生。60歳の記念に海外の20 kmレースに数年がかりで準備し、見事、泳ぎきった女性も。

元気な先輩たちの刺激を受けて、私も心を入れ替えて、再び自分の練習もはじめた2007年です。5月に、NHKのちゆらさんで有名になった小浜島で開かれる9 kmの団体泳(1チーム3人がそろって泳ぐレースで、黒島から小浜島へ泳ぎ渡る)に参加の予定。

田中良子さん



「女子マラソンを励ます会」会長
広山選手(左)と
(東京都杉並区)

私たちは、女性ランナーの“走り”に魅せられて、2000年に「女子マラソンを励ます会」を設立しました。活動の1つとして毎年1回、多くの人に感動を与えているランナーを表彰してきました。今年はトップレベルランナーとして弘山晴美選手を、市民ランナーからは6名を選んで表彰式を行い、WSF ジャパンの三ッ谷洋子代表にもご出席いただき「お祝いのお言葉」をいただきました。

私たちの会は「より楽しく、より速く、より美しく、そしていつまでも」をモットーに、1人でも多くの女性を走る仲間にお誘いすることを目標にしています。また、トップレベルランナーと市民レベルランナーの架け橋をつくり、よりよく走り、よりよく楽しく生きる女性の生き方などの意見交換や交流をしています。

「トークショー」「セミナー」などでは、これまでに浅井えり子、大南敬美、谷川真理、千葉真子、土佐礼子、藤村信子、山口衛里選手(50音順)ほか、市民ランナーも多数参加していただき、共に走る者としてお互いに「励まし、励まされ」ながら、次への活動への意欲を高めていくことを行っています。

昨年11月、新しく会長になりました。やりたいことが山ほどありますが、乗り越えなければならない障害も伴います。そのような中で、今年2月に関西支部が立ちあがったことは、私たちにとって大きな喜びです。

以上は近況報告ですがその他の活動についてはホームページをご覧ください。http://www.sewm.jp

◆◆◆ 事務局便り ◆◆◆

◆女子バレーの「会」が難民支援

表紙の写真は、WSFジャパン会員の荒木田裕子さんが事務局長(理事)を務めている「NPO法人バレーボールモントリオール会」が、この4月に早稲田大学の学生たちと共に、ネパールの難民キャンプ支援プロジェクトで現地に訪れた際のものでした。

「モントリオール会」は、1976年のモントリオール五輪で金メダルを獲得した女子バレーボールの代表選手や取材記者が中心になって、2005年12月に「スポーツを通じた社会貢献を目指して」設立されました。

代表理事は当時のキャプテン飯田高子、副代表理事は白井貴子、前田悦智子と、懐かしい面々が並んでいます。12人全員が顔をそろえているところが素晴らしいと思います。

国内各地でのバレーボール指導から、海外でのボランティア活動へと、活動の場を広げています。日本の女性スポーツに新たな流れが生まれています。(三ッ谷)

<NPO法人バレーボールモントリオール会>

http://montreal.sports.coocan.jp/

◆女性スポーツ医学研究会報告

女性スポーツを振興する上で大きな課題の1つは、医学的な見地からの研究です。女性スポーツ医学研究会(目崎登会長)は、昨年12月2日に第20回学術集会を開催しました。昨年の特別講演は次のようなテーマと講師でした。

特別講演 I: 「食育とスポーツ選手への栄養マネジメント -理論に基づく栄養教育・サポートの考え方」 首都大学東京大学院 人間健康科学研究科ヘルスプロモーションサイエンス系助教授・稲山貴代

特別講演 II: 「女性スポーツ外傷 -膝関節を中心として」 早稲田大学スポーツ科学学術院

教授・福林徹

毎年12月に学術集会があり、一般の参加も可能です。

<女性スポーツ医学研究会>

http://sowism.umin.jp/gakujutsu.html

◆柔道界の頼もしい理解者

昨年12月4日、東海大学望星学塾「湘南望星ゼミナール」で、三ッ谷洋子代表が「女性が1世紀をかけて戦ってきた相手とは」の演題で次のような内容の講演をしました。

*女性の活躍とオリンピックの思想 * “女らしさ”と戦ってきた「女性スポーツ」 * マラソン、テニスの世界の女性の戦い * 国際女性スポーツ会議の開催とWSFジャパンの活動 * IOCの女性戦略と日本の現状

当日は、WSF ジャパン会員の橋本敏明さん(同大教授)ほか、山下泰裕さん(同)や大学院生も聴講されました。場所を移しての懇談の席では、山下さんが熱心に女性スポーツの振興について質問をされていたとのこと。

柔道の世界の、“頼もしい理解者”の存在に力づけられますね。写真は上段左から塚田真希



さん(アテネ五輪金メダリスト)、三ッ谷代表、山下泰裕さんほか、同大学院の皆さんです。(高橋)

◆寄付の御礼(5月末日現在=敬称略)

以下の方々から、ご寄付をいただきました。こころより御礼を申し上げます。(順不同)

・荒川御幸・千葉吟子・関美那子・井上喜久子・猪浦玲子・福田富昭・後藤忠弘・光岡かおり・野々宮徹(計9人、10件 27,526円)

WSF Japan News Vol.46 (2007年5月)

女性スポーツ財団日本支部機関紙 第46号

発行: WSFジャパン 発行人: 三ッ谷洋子

編集・製作: (株) スポーツ21エンタープライズ

〒157-0071 東京都世田谷区千歳台1-41-19-310

TEL 03-5490-1877 FAX 03-5490-5922

E-mail info@wsfjapan.org URL http://www.wsfjapan.org

WSF ジャパン（女性スポーツ財団日本支部）とは

1981年12月、米国WSF(Women's Sports Foundation = 女性スポーツ財団)をお手本として設立されたボランティア団体です。プロ・アマや年齢・性別を問わず女性スポーツに様々な形で携わる人たちが抱える諸問題を考え、女性スポーツの発展と振興を図ることを目的としています。

主な活動は、①機関紙WSF Japan Newsの発行 ②女性スポーツの現状についての調査研究 ③女性スポーツに関する情報提供など。

会員は、元選手、指導者、研究者、マスコミ、スポーツ関連企業関係者、スポーツ愛好者など男女を問わず、様々な分野に渡っています。

〈入会金と会費〉

・学生会員	3,000円	5,000円
・個人会員	3,000円	8,000円
・団体会員	5,000円	15,000円
・賛助会員	50,000円	100,000円
・会報会員	なし	3,000円

WSF ジャパン（女性スポーツ財団日本支部）

〒157-0071 東京都世田谷区千歳台1-41-19-310

電話：03-5490-1877 ファクス：03-5490-5922

E-mail: info@wsfjapan.org URL: http://www.wsfjapan.org

~~~~ 米国WSF（女性スポーツ財団）について ~~~~

1974年、米国のトップテニス選手だったビリー・ジーン・キングが提唱して設立されたのが、非営利の女性スポーツ振興団体WSFです。発起人は、東京オリンピック陸上競技100m優勝のワイオミア・タイアスを始めとする米国のプロ・アマ一流選手や指導者、研究者などです。

毎年、秋の「表彰式」では、有名選手とディナーで同席できる形式として、チケットを一般向けに高額で販売するなど、様々な活動で資金を捻出し、女性スポーツの振興に取り組んでいます。

Women's Sports Foundation

Eisenhower Park, East Meadow, NY 11554 Tel: 516-542-4700 Fax: 516-542-4716

E-mail: info@womenssportsfoundation.org URL: http://www.womenssportsfoundation.org

女性スポーツを応援しています。

スポーツビジネス総合シンクタンク

SPORTS 21[®]